



須田 努
Tsutomu Suda
情報コミュニケーション学部教授
日本近世・近代の社会文化史・民衆史

Profile

1959年生まれ 群馬県高崎市
1981年 明治大学文学部史学地理学
科考古学専攻卒業
1999年 早稲田大学大学院文学研究
科日本史学専攻博士後期課
程修了
2008年 明治大学情報コミュニケー
ション学部准教授
2011年 同上 教授
現在に至る。

主な単著・論文

『「悪党」の一九世紀』青木書店、2002年
『イコンの崩壊まで』青木書店、2008年
『幕末の世直し』吉川弘文館、2010年
『江戸時代 民衆の朝鮮・朝鮮人観』
『思想』No.1029、2010年
『横井小楠と吉田松陰』趙景達他編『講
座 東アジアの知識人』有志舎、2013年

主体としての吉田松陰

現在、わたしは吉田松陰の思想と行動を解き明かす研究を進めています。まずは、吉田松陰を扱った読み物の出版状況を分析してみました。すると、一九三八〜四四年の間と、二〇一〇年以降とが、出版数が飛び抜けて多いことが分かりました。前者はいうまでもなく、アジア太平洋戦争の最中、ファシズムの時代です。これと二〇一〇年以降の政治・社会状況とを比較してみると、おもしろいと思います。現在の松陰物（小説・ムック本）のほとんどは、読むに耐えないもので、司馬遼太郎『世に棲む日』の焼き直しか、「超訳」と銘打って好き勝手な「読解」をしたものばかりで、「偉大な思想家」

「誠実な教育者」という根拠のない語りとなっています。ところが一方、二一世紀に入って以降、松陰を対象としたまともな研究書はほとんど出版されていないのです。吉田松陰ほど、評価の振れ幅が大きい人物はいません。右から左まで、時代の都合により、彼の言動は政治的に解釈されてきたと言ってしまうでしょう。この問題は、徳富蘇峰が改訂版『吉田松陰』（一九〇八年）において、帝国主義者としての松陰像を創り上げたことから始まる、ということが従来の見解です。わたしは、徳富蘇峰が初版本『吉田松陰』（一八九三年）の冒頭で、松陰を横井小楠（幕末の思想家）から影響を受けた「同類」＝思想家で

あるかのようなイメージを創ったことに発端がある、と考えています。ペリー来航に衝撃をうけた松陰は、『君臣上下一体論』を提起しますが、これが幕府を相対化する危険なものである、ということに気付いていません。さらに、これを普遍化するために必要な「国体」という概念を内面化できていません。つまり、松陰は自己の政治的意見を具現化する手法（教養）を持ち合わせていないのです。アメリカへの密航に失敗した松陰は、一八五四（安政元）年、萩の野山獄に入れられ、読書に時間を割き、ようやく幅広い教養を得え、多くの政治意見書を作成しています。そこには

復元された松下村塾



野山獄跡



吉田松陰生誕地からの萩城下（正面の山が萩城跡）

列強の武力に屈して、和親条約を締結したために、神州（日本）の国威は地に墜ちた、神功皇后が三韓を征した時のように、国威を張り、「夷狄」を排除すべきである。そのためには富国強兵の大策が必要である

といったことが披瀝されています。「富国強兵」という熟語を国家規模のアジエンタとして語った最初の人物は松陰です。しかし、彼の論理は長州藩の儒学者山県太華によって論破されてしまいます。松陰が残した史料を丹念に読むと、彼が思想家であつたなどとは言えません。彼は自己の論理を普遍化するための術をもっていないのですから。松陰の人としてのすさまじさは、本人がそのことを自覚していた点にあります。この頃から彼は、行動により時代を変えようと覚悟を決め、自己を「狂夫」と表記し、間部詮勝（老中）の暗殺を計画します。安政という時代、幕府を倒せるなどと考えている人間はいません。松下村塾の弟子たち（久坂玄瑞・高杉晋作ら）は、過激な師匠について行けず、離れていきます。松陰の学統は崩壊寸前であつたのです。「草莽崛起」を唱える松陰

を危険視した長州藩家老周布政之介は、彼を幕府に引き渡してしまいました。そして、松陰は安政の大獄の渦中に処刑されたのです。

松陰の危機意識と行動が、高杉晋作の行動を生み、明治維新の原動力となり、日本が独立を維持できたことは事実です。しかし、松陰が提起し帝国日本へと引き継がれた「富国強兵」の虜となった日本が、東アジアにもたらした惨禍は余りにも大きかったと言えます。そして、「富国強兵」を選択した帝国の寿命はわずか七〇年ほどしか続かなかつたことも事実です。

松陰本が多く出版された戦中と現在、共通することは日本の国力が低下している、と国家指導者たちが認識しているということ、相違するのは、あたかも社会全体がそのことに危機感を抱いているかのような言説が飛び交っている現在の状況です。さらに問題は、危機意識をもって行動した吉田松陰が、現状を打破する力として時空を超えて持ち出される、という事にあります。歴史は繰り返したりしません。吉田松陰を主体（agent）として認識しつつ、彼の言動を分析し、彼が生きた時代に位置づける必要があるのです。